

## かわのはなし

### 8. 鞣し (2) 鞣し剤

川村通商株式会社 鍛治 雅信

マングローブタンニンというものをご存知の方は少ないと思います。

私も皮革の勉強を始めた頃に読んだ本では、[渋とタンニン]という項目で、カテコール族渋類の中で樹皮から採取する物に、ミモザと並んでマングローブやヘムロックと書かれていました。

今ではミモザ以外のタンニンは殆ど忘れ去られています。

ヘムロック樹皮は主にアメリカで使用されてきたタンニン剤で、非常にもろく腐りやすいために森の近くのタンナーだけが使用していました。

しかし1880年頃からは樹皮からタンニンを抽出する技術が発達した為、樹皮ではなく抽出液、即ちエキスとして使用できるようになりました。樹皮の10%程度しか含まれていないタンニンの使用から、高濃度のタンニンエキスの使用で革の製造工程も大きく改善されました。またエキスは樹皮と比べ輸送が簡単なので、ヘムロック樹皮エキスはオーク樹皮エキスと並び広く使用される様になりました。

それまでアメリカのタンナーは、樹皮の取れる森の近くで、その森で取れる樹皮しか使用できませんでしたが、輸送の簡単なタンニンエキスの開発は、色々なタンニンエキスを組み合わせての使用や、タンナーの製造場所の移動も可能としました。ヘムロックとオークにスマックといったタンニンエキスの混合使用で新しい革が開発されていきました。

皮は食肉製造の副産物なので、シカゴなどの大きな食肉市場の傍にタンナーが集まり、そこには革の使用産業として多くの靴工場が集まりました。

ヘムロックの話から、アメリカの靴産業の

話へとそれてしまいましたが、今回はマングローブタンニンの話です。

ヘムロックタンニンの時代には中央アメリカで、マングローブタンニンが多く使用されていました。しかし、品質的に良くないマングローブタンニンは徐々に使用されなくなりました。マイアミを含め今ではリゾート地になっている中央アメリカの海岸地域は、元はマングローブの森でした。

私は最初、マングローブという木があると思っていましたが、マングローブというのは木の名前ではなく、熱帯・亜熱帯地域の汽水域の樹林の事だったのです。そこには色々な種類の木がありますが、タンニンを抽出するのはヒルギ類の木からです。

マングローブタンニンの事を調べている内に、昭和18年1月発刊の本に出会いました。

財団法人南洋経済研究所が出した本です。

<タンニン資源としての紅樹林>と言う題です。当時は太平洋戦争のまっただ中で、マングローブも漢字で紅樹林と書いていたのですね。本の内容はマングローブ樹林の話から、伐採、剥皮、粉碎、タンニンの抽出法など非常に詳しく書かれています。

またマングローブタンニンの特性として、汽水域に生息する為、1%の食塩を含んでいる事や、ミモザと比べての色の差や物理特性の差まで書かれています。何れも品質的に劣りながらも、いかにマングローブタンニンが日本にとって必要な物かを力説しています。

戦争には軍人が必要で、軍人には革製品が必要なことは歴史的に見て解ります。

当時の日本にとっては、東南アジアで半ば無尽蔵にあるマングローブタンニンを手に入れないと革が作れないほど追い込まれていたよ

うです。

当時の東南アジアでマングローブタンニンを作っていたのは、アイルランドのツレーディング社とロンドンのバカウカッチ社の2社でした。これらの工場の生産規模や参考例として、アメリカのヘムロックエキス工場の生産規模を示し、これらを凌駕する為に必要な設備まで言及しています。

日本では、このマングローブタンニンエキスの事をカッチやカッチンと呼んでいました。

英語ではMangrove Cutch と書きます。

このカッチというのは正式にはカテキユー(Catechu)を短縮した物で、語源はヒンズー語の[木のジュース]から来たと言う事です。

アジア産のタンニンエキスに対して使用され、マングローブカッチやガンビアカッチなどに使われます。

実は私の勤めている川村通商(株)ではタンニンの販売は古くから行っています。創業当時は天然皮革の鞣し用ではなく、魚網の染色用に販売していました。そしてこのカッチも販売していたようです。カッチと硫酸銅を主剤とする定着防腐染料の特許を取り、[ラインド・モダント]と言う名前で販売していました。明治43年頃(1910年頃)の事です。

当時はクレオソートやコールタール、マドラス藍などが魚網防腐染料として使用されていた事が社史からうかがえます。

今でも少量ですが、国内数箇所の漁協に固形のタンニンエキスの販売を行っています。

抽出したタンニンエキスを濃縮し、冷えて固まる程度の濃度になると、パラフィン紙を敷いた箱の中で固め、水分が約10%程度の状態で輸出されていました。現在ではジュート袋に流し込んで冷やして作ります。外見は石炭の様です。

正式名称がカッチでも、カチカチに固まった物を見ればカッチンと呼ぶのも解らないではありません。

現在ではマングローブエキスはありませんが、私の会社ではケブラチヨやミモザタンニ

ンエキスも固形の物が有り、古い顧客からはカッチンと言って注文が来ます。

実際、植物タンニン剤の粉末が発売されたのは、さほど昔の事ではなく、スプレードライと言って、濃縮エキスの液体を細いノズルの先から空中に噴射し、それが落ちる間に加熱した場所を通る事で粉末にする技術が出来てからです。

現在のようにコンテナが発達し、山の様にコンテナを満載した船が世界中の海を渡り、鉄道やトラックでコンテナごと工場まで届く様になったのも、ほんの最近です。

昔は大きな船の船倉に荷物を積んで港の外まで行き、それを小さな船に移し替えて港で荷卸していました。

タンニンエキスも同じで、大抵の倉庫は港近くの運河沿いに有りました。そこで舢舨<sup>はしげ</sup>という荷物運搬用の小船で倉庫の傍まで運び、手鍵と言う独特の道具を使って荷物を移動させます。

当時から固形エキスは50kg入りなので、今でも手鍵を使うと運搬が楽に出来ます。

タンニンエキスが固形から粉末に変わってからも、倉庫で働く人たちは使い慣れた手鍵で荷物を移動させるので、以前は袋に穴が開く事故が多発していました。

ダンボール箱などに<天地無用>と並んで<手鍵無用>と書かれていた頃もありました。

前述の通り、品質的に他のタンニンより劣るマングローブタンニンは終戦と共に無くなりました。しかし、マングローブ森はその後も伐採が続き、安価な炭の原料になったり、跡地は養殖エビ用の池になったりしています。

もともと森での植物同士の生存競争に敗れ、他の植物の生育に適さない汽水域に活路を見出した植物たちで作るマングローブ森です。

最近の研究では種々の生き物達の成育に最適な環境を与えているとの報告も有ります。環境バランスを考慮した伐採が望まれます。

現在も自然木を伐採してタンニンを取っているものに、ケブラチヨがあります。

今回はこの話です。